

本校の学校方針	質の高い授業と親身な指導を通して、進路実現に必要な学力をつけるとともに、地域社会の多様なニーズに応え、郷土に貢献する「知、徳、体、志」のバランスのとれた人材を育成する。
指導重点目標	①自己実現を可能にする学力の向上 ②基本的な生活習慣と社会的規範意識の確立 ③安心且つ切磋琢磨できる人間関係の構築 ④保護者・地域と連携した活気ある学校づくり

重点目標	年 度 当 初				最終評価			
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方法
①自己実現を可能にする学力の向上	高い志の育成	○目的意識と学ぶ意欲の向上	○進路目標が明確でなく、学習に対する意欲に欠けている生徒がいる ○自らの可能性を低く評価してしまい、チャレンジする姿勢に欠ける傾向がある	○「みらいチャレンジ活動」を中心に学問に対する興味や意欲を高め、主体的に学ぶ姿勢が身につく	・「みらいチャレンジ活動」を充実させ、地域への公開も図る ・1年生・3年生の総合的な学習の時間の改善に向けて学年主任との連携を図る ・1年生での準備段階を充実させる。特に、話し合い活動を活発にするため、1年生でコミュニケーショントレーニングを取り入れる	・地域への公開として、2年生による成果発表会をコンベンションセンターを利用して行った。生徒をはじめ、保護者・教育委員会・評議員等にも参観してもらい、当初の目的は達成されたと考えられる ・1年生における新規事業としてのコミュニケーショントレーニングは、1年担任団だけでなく生徒支援部・教務部との連携を深め、より綿密な計画となるようしなければならない	B	・1年生における総合的な学習の時間の改善はある程度進んできているが、3年生の改善に向けて取り組みを活性化させる必要がある。3年担任団からも案を出してもらい、どのような力を付けさせるか議論をしていく ・1年担任団との連携を深め、コミュニケーショントレーニングを検証していく
		○自ら課題を見つけその解決に向けて積極的に行動する態度の育成	○体験的な活動を重視し、目標達成に向けてチャレンジする態度・能力が育つ	・読書活動・体験活動を充実させるよう関係機関との連携を図る ・1・2年生でビブリオバトルを実施し、学年団・図書部と連携しながらコミュニケーション能力を育成をする	・今年度1年生ではビブリオバトルを実施したが、2年生では割愛し、「みらいチャレンジ活動」の中で図書館利用をすすめるように計画を立て実践してきた。若干図書利用を推進できたものの、調査の主流がインターネットを利用することであり、大きな読書量の増加とはならなかった ・1年生で図書利用の重要性を認識させ、2年生の活動に当たらせる必要がある	・1年生でのビブリオバトルの説明の中で本校における「みらいチャレンジ活動」での調査の重要性やインターネットでの情報検索より書籍の方が情報としての信頼があることについて認識させる		
	質の高い授業の実践	○教員の授業力の向上を図り、生徒が主体的に参加する授業の創造	○生徒の授業への姿勢が受動的である ○授業での教師に対する評価、生徒の達成感が十分でない	○アンケートにおける生徒の達成感に関する肯定的な回答が70%以上、教師の指導力に関する肯定的な回答が80%以上になる ○全教員でアクティブラーニングに取り組む	・全教科、全教員でアクティブラーニングに取り組み、一層の授業力向上を目指す ・「みらいチャレンジ活動」と各教科でのアクティブラーニング型授業により、生徒の一層の能動的な授業態度を育成する ・i P a dを中心としたICTの活用をさらに広げる	・各教科で公開授業の月を決め、全教員でアクティブラーニングに取り組むことができた。また、その中で他県の教員を招いての示範授業も有意義であった ・公開授業の中でi P a dを利用した教員も何名かいた ・生徒のアンケートで教員の指導力に関する肯定的な回答は約60%であり、目標値に届かなかった ・生徒のアンケートで学力が向上した、学問に対する興味・関心が高まったと回答したのがどちらも約56%であり、必ずしもアクティブラーニング型授業で興味・関心や学力の向上を実感できていないという結果がでている	B	・来年度も同様に全教科、全教員でアクティブラーニングに取り組むが、その内容のブラッシュアップに努める ・公開授業の教員相互の見学を通して、教科指導の中にアクティブラーニングを定着させる
		○習熟度別クラス編成、習熟度別授業のより効果的な展開	○生徒の学力の分析を行い、分かる授業を展開している ○先進校視察を参考にして効果的な学力向上策を立てる	・学校課題に対応した先進校視察を通じて、本校に利用・導入できるものは積極的に取り入れていく ・生徒の習熟の度合いに合った授業・考査・評価を工夫する	・先進校視察を通して本校の将来の方向性について検討を行った ・生徒の習熟の度合いに合うように、習熟度別クラス毎に授業で取り扱う内容を精選し、考査もそれに沿う形で作成・出題した。また、教科内の連携を密にして、適正な評価を行なった	・先進校視察で得た事例を参考にして新たな本校教育の方向性を決定する ・次年度より1年生では国語に習熟度別授業を導入し、学習習慣のさらなる定着を図る予定である ・生徒の実態と到達目標を見据え、的確な教材の選定と考査の作成・出題を行なっていく		
	学習習慣の確立	○高校での学習方法の理解と必要とされる家庭学習時間の確保	○予習・復習をしている生徒もいるが、効果的な学習方法がわからない生徒もいる ○全体として目標とする家庭学習時間に届いていない	○家庭学習時間調査で次の目標を達成する 平日： 1・2年生2時間以上、3年生3時間以上 休日： 1・2年生4時間以上、3年生5時間以上 ○オリエンテーションを通しての学習習慣の確立と学習方法を理解する	・課題の内容や量を精査しながら学力および学習意欲の一層の向上につながるよう取り組ませる ・進路講演会や個人面談等を通じて、日々の学習の大切さを生徒に理解させ、継続的に指導を行う ・生徒の能動的な学習につながるよう初期指導の充実および日常の継続的な指導を行う	・期限内に課題を提出できなかった生徒に対して、放課後の居残り指導により、課題の提出を徹底できた ・各学年とも第2回家庭学習時間調査で減少傾向が見られた。第3回の調査で回復傾向が見えたのは3年生のみで、1・2年生の取り組みに課題を残している ・1年生の初期指導は、パワーポイントを利用して内容の充実を努めた ・面談を通して、生徒個々の状況に合わせた指導ができた	B	・課題の質・量を精査し、学習習慣の定着と学習意欲の向上を図る ・配慮が必要な生徒に対しては個別に対応していく ・1年生の初期指導については、年度当初の日程の改変と国語での習熟度別授業の導入に伴い、一層の充実とその後の継続的な指導につなげていく
○休日や長期休業における学習の充実		○土曜学習会、長期休業中の講習の参加者が増加する	・夏季学習会では、事前に生徒に計画をきちんと立てさせ、より明確な意識をもって学習会に当たれるようにしていく ・部活動との両立の一助になるよう各部活動との連携を図る ・模試の復習においてデジタルサービスのより有効的な活用方法や指導方法について学力向上委員会等で検討する	・夏季学習会の参加者数は昨年比比べ4割程度増加した ・アンケート結果でも参加してよかった生徒が90%を超えている ・部として参加を課す部活動もあった。また、学習意欲が学習会終了後も継続するように指導した	・学習会での意欲が日々の学習につながるよう事後の指導もしていく ・部活動との両立の一助になるよう各部活動との連携を一層図る			
国公立大学に合格できる力をつける力をつけた生徒の増加	○主体的に進路を選択できる能力の育成と戦略的な進路指導組織の確立	○目標とする国公立大学の現役合格者数にわずかに届かなかった ○入学時点での学力差が広がり、進路意識の多様化が進む傾向にある	○キャリア教育を通して自立的な進路設計とその実現ができる生徒が増加する ○進路指導部を中心とした進路指導組織の確立する	・3年生の進路講演会は予備校から講師を招いて実施する等内容を変更する ・10月と12月の進路調整会のあり方について3年学年団の意見を踏まえて、個人懇談や三者懇談で志望校決定の具体的な資料が提供できるようにする ・引き続き先進校視察、教員による大学訪問を実施し、進路指導に有効な情報の収集・蓄積を図り、生徒への指導に活かす	・3年生進路講演会では、学校選び・模試の活用などについて具体的に説明してもらい、勉強中心の生活に切り替えるよい切っ掛けになった ・生徒に適した学校を勧めることができる情報を蓄積するため、4つの国公立大学を訪問した	B	・予備校講師による3年生の進路講演会は今後も継続していく ・3年間で近隣の国公立大学への訪問をほぼ行うことができたが、今後も生徒が希望する大学、学校目標に合致する大学への訪問は継続していく	
	○模試結果の利用とセンター試験を意識した指導	○1月進研模試で偏差値50以上の生徒数が1年生で160人以上、2年生で140以上になる ○国公立大学の現役合格者が60人以上となる	・1・2年生の予備登録・本登録の時期や3年生の総体後など、回数は少なくとも進路を考えるべき時期に「進路だより」を通じて必要な情報を発信し、意識を高めさせる ・模試等で数値目標を設定し、その実現に向けて委員会で検討を行う ・模試分析を活用し、授業内容の改善と課題の工夫に繋げる	・1月中旬時点で1・2年生は2回、3年生は1回の「進路だより」を発行した ・11月校外模試の偏差値50以上の人数は、1年生75人（3教科型）、2年生108人（5教科型）であった。2年生は過年度と同程度であるが、1年生の成績がかなり悪かった	・1・2年生向けには年度内にあと1・2回「進路だより」を発行する予定である ・1年生の11月の模試後に、復習方法に関して各教科でプリント等を使って指導をした。1月の模試の結果を見て、必要があれば模試への取り組みや復習方法について改良を重ねていき、来年度もそれを取り組みたい			

重点 目標	年 度 当 初					最終評価		
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方法
評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）								
②基本的 生活習慣 と社会的 規範意識 の確立	基本的生活 習慣の確立	○健全な心身の育成	○問題行動は若干あったが、生徒全体としては概ね落ち着いた学校生活を送っている ○昨年度は一昨年度に比べ遅刻する生徒が若干増加した	○年間の問題行動発生件数が0になる	・2・3年生への働きかけを強化し、学年集会、終業式等で強く注意喚起する ・教室掲示用の「生徒部からの注意」を学期ごとに作成し、問題行動の発生防止に努める	・問題行動により指導を受けた生徒は1人だったが、1学期に全校をあげて取り組まなければならない事案が発生した。教職員による校内巡視や生徒への注意喚起などにより、2学期以降は発生しなかった ・SNS関連や男女交際での注意等の指導は2件あったが、全体としては概ね良好であった	B	・学年集会や終業式等の機会をとらえて、所持品管理の徹底や問題行動をしないよう注意喚起を行う
		○学力向上につながる生活リズムの確立		○年間遅刻者数が前年比10%減となる	・引き続き毎朝の昇降口指導を行い、遅刻者ができる限り減るよう務める ・精神的な問題を抱えている生徒については、生徒支援部との連携を行う	・遅刻者は昨年に比べわずかに増加し、残念ながら減少させることはできなかった。また、遅刻にはならないものの、8：25以降に登校してくる生徒が大幅に増加した ・生徒に指導に際しては、配慮が必要な生徒の場合は生徒支援部と連携をとった		C
	社会的規範 意識の育成	○社会の一員としての自覚の喚起	○自転車の運転マナーはやや改善したが、苦情の通報がまだある ○TEASの活動については、ゴミの排出量、電力使用量、水道使用量とも現在のところ今年度の取り組み目標をほぼ達成できている	○地域からの信頼が向上する ○環境を意識した生活を送る	・自転車通学時の事故も発生しており、自転車通学者への指導を強化する ・街頭指導の回数を増やすとともに、安全運転教室等の開催も検討する ・TEASに関しては、今年度の目標を達成する努力を継続していくとともに、生徒の環境意識を高める取り組みをしていく	・多くの生徒はルールやマナーを守って自転車通学を行っているが、一部の生徒がイヤホン使用や右側通行で指導を受けた ・自転車通学についての苦情は、きわめて少なくなった ・TEASの目標もおおむね達成している	B	・大きな自転車事故は起こっていないが、依然として10件以上の事故が報告されており、引き続き街頭指導等を通して安全運転の徹底を図る ・生徒会執行部の活動はもちろんのこと、保健委員会とも協力して、生徒の環境意識をさらに高める
③安心且 つ切磋 琢磨できる 人間関係 の構築	健全な高校 生活の充実	○部活と学習の両立ができる生徒の育成	○定期考査前の部活禁止期間も徹底できるようにはなっている ○生徒会活動全般において、生徒会執行部が主体的に活動している	○部活動と学習の切り替えがきちんとできる	・週1日の部活動休養日を設ける ・引き続き定期考査前の部室の鍵の受け渡しについては、活動申請を確認したうえで行うようにする	・週1日の部活動休養日の設定、定期考査前の部活動に関する申し合わせ事項については、概ね徹底できている ・部室の鍵の返却は良好である。部室の清掃なども徹底されるようになってきた	A	・引き続き、部活動に関わるルールや申し合わせ事項の周知徹底を図る
		○部活動・生徒会活動の活性化		○部長や生徒会執行部を中心とした自主的な活動ができる	・生徒会執行部の生徒たちが、自分たちの仕事や年間の生徒会行事をスムーズに進行している現在の状況を維持する ・上級生が下級生に仕事内容を指導する体制も作れており、1年生も積極的に活動に参加している。この状態を大切に、一層の生徒会活動の活性化を図る	・生徒が学校行事や生徒会活動に積極的に参加できている ・生徒が教師と連帯感を持ち諸行事を行うことができています		B
	望ましい人間 関係の構築	○自己の個性の理解と他者の個性の尊重 ○自尊感情の育成	○コミュニケーションが苦手な生徒や不適応の生徒の増加傾向にある ○SNS等でトラブルがおこることがある ○ボランティア活動への参加者は増加している	○自分を含め一人ひとりが大切な存在と認識できる ○良好な人間関係およびコミュニケーションができる	・学期毎の職員会議において生徒の状況報告を行い、職員間の情報共有をさらに深める ・情報リテラシーに関する講演会は、今後も入学予定者とその保護者に対して継続する ・教科「情報」だけでなく、iPadを用いた授業においても情報リテラシーについて積極的に取り上げる	・PC内の「支援部周知事項」を定期的に更新し、また毎週の支援部会議・毎月のケース会議により、綿密な生徒対応を図っている ・情報リテラシーに関する講演会を入学予定者とその保護者に対して実施した	B	・緊急対応が必要な場合の手順の明確化を図り、外部専門機関との連携をさらに深める ・生徒と保護者が同じ講演会を聞くことは有意義であり、来年度の入学生についても講演会を実施する
		○社会貢献活動への積極的な参加 ○主権者意識の育成	○各種ボランティアへの参加者が一層増加する ○学校として地域貢献活動へ取り組む	・総合的な学習の時間や校内のHR活動と運動させながら、より一層のボランティア活動の活性化に取り組む ・地域での清掃活動を通して、生徒にも地域に関心を持たせる一助とする	・残念ながら県社会福祉協議会ボランティア体験授業への参加者は、昨年度の約半数にとどまった ・地域での清掃活動については、1年生の活動が天候により中止となった	D	・希望した事業所でないために体験事業をキャンセルした生徒が多くあり、生徒の希望が通るような対策を検討する必要がある ・清掃活動については、学年単位のものだけではなく、部活動単位や年間を通した形態のものなどを考えていく必要がある	
④保護 者・地域 と連携した 活力ある 学校づくり	学校教育活動の積極的な公開	○PTA活動の一層の充実 ○学校と保護者の連帯の強化	○PTA大学訪問研修や交通安全街頭指導にも保護者の積極的な参加がある ○ホームページを利用しての情報発信方法を改善した	○PTA活動への参加者が増加する ○よりタイムリーにホームページの更新を行う	・緊急時は、ホームページでもタイムリーな情報発信を行う ・教育活動の発信についても、担当者が校務委員会で確認する ・公開授業や「翠燦く」等の公開できる行事に関しては、地域の小中学校等にも案内を行う	・学校が行っている様々な教育活動について、ホームページでタイムリーに発信できた ・交通安全指導や2000人壁画など保護者が積極的に参加している ・3月に行われる「翠燦く」は中学校に案内をする予定である。	A	・ホームページの意義や役割を踏まえて、より充実したホームページになるよう発信を続ける ・部活動においてもさらに多くの部活動が積極的に発信するようにする
		○公開授業や人権公開LHRの充実		○保護者、関係機関、地域からの参加者の増加する	・保護者への案内文書やPTA広報紙での発信に加え、ホームページの更なる活用や地域への発信も行う ・例年発行のPTA人権広報誌により、生徒・保護者への内容の周知とともに人権意識の啓発を図る	・全学年で人権教育講演会と公開LHRを実施した ・広報誌による発信も定期的に実施したが、参加者は例年並みにとどまった		B
	地域や関係 機関との 連携の強化	○中高連携事業の一層の充実 ○文化部総合芸術祭「翠燦く」の一層の充実	○芸術科を中心とした中高連携事業は年々参加者が増加し、定着してきた ○高大連携により「みらいチャレンジ活動」の充実を図ることができた	○芸術科だけでなく、他教科も含めて連携を模索する	・中高連携事業の内容について中学校と連携し検討する ・「翠燦く」は、今までの多面的な感想を取りまとめ今後に生かすよう検討する	・中高連携事業は多くの参加者があり、ほとんどの参加者が来年も参加したいという感想を述べている ・「翠燦く」は、11回目となり新たな気持ちで、より充実した企画となるよう準備中である	B	・中高連携事業では、より高校生が主体的に中学生へ働きかけられるよう意識改革を促したい ・「翠燦く」は、再スタートという気持ちで新たな取り組みに積極的に挑戦していきたい
		○高大連携の強化と生徒の変容	○各大学訪問の参加者の予定人数が確保できる ○アドバイザーの指導により「みらいチャレンジ活動」が一層の充実する	・大学訪問については、本校の卒業生との懇談等を取り入れ内容を充実させる ・「みらいチャレンジ活動」は、今年度もアドバイザー（大学教授）を迎え専門家から見た活動への評価を参考にする	・島根大学の大学訪問では卒業生との懇談はできなかったが、島根県立大学・鳥取大学では卒業生との懇談を通して大学生生活・大学での研究内容等の実態を知ることができた ・今年度もキャリアアドバイザーとして島根大学の作野広和教授から指導助言を仰いだ。「みらいチャレンジ活動」を発展させるための提言であり大変貴重なものとなっている	A	・大学訪問の内容は充実してきているものの、大学で研究している内容について見学・体験することはできていない。大学訪問とは別に大学での研究発表会などに参加する機会を設けるか、あるいは大学訪問に代えて実施するか検討したい ・キャリアアドバイザーの存在は、「みらいチャレンジ活動」に対する客観的な評価と今後の活動に関する意見の提言が期待でき、今後も同様な形で継続したい	

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）